私の保育

水野恭子

はじめに

上越市には、「たんぽぽ園」という保育の場がある。ここには、重度心身障害児小規模母子通園事業という長い名前が行政からつけられている。「たんぽぽ」は、今、四歳になる。その間、ここにかかわる全ての人の願いと理想が、不遇だった就学前のハンディキャップを持つ子らの光明となってきた。

昨年九月、前主任保育者から保育を引き継いだ。私の保育の良心に従い、子どもの幸せとなる保育をやりたいと思った。子どもの内からの要求に即した保育に重点をおいた。上越では、この自由保育と呼ばれる形態を集団保育への口火である「オアソビ」としかとらえていない園が多い。しかし、私は、自由保育こそが真に子どもの発達を促すものと信じ、大切にその時間を使うことにした。描画コーナーを作り、クレヨンの使用を自由にし、楽器を開放した。マットや平均台、ボール、クッションなどを勧め、そして、何よりも園外保育を多くした。体全体で創造的に動いてほしいと思ったのだ。日本海の潮の香りのする松林の公園を、今日も子どもらは走りまわっている。

たんぽぽ園には自閉的傾向を持つ子が五人いる。ここでその中の三人との出会いを語ろうと思う、つたない一文の中から何かを感じていただけたら幸いである。

Aとの出会い

一九七六、九、二四

始めて大きなボール（直径一メートル位のゴムボール）にかかわってきた！

いつも行く隅のすべり台の階段に彼がいる。

私、大きなボールで一人遊びをしていた。

彼が私とボールを見ている。

私、ボールをそろそろ押していく。彼を見ないふり。ボールをすべり台にくっつける。後向きになって、背中でボールに反動をつけながら、小さく歌った。「ドはドーナツのド……」（この歌は子どもが大好き）

彼、足をそっとボールにつける。

私、知らないふり、はずみをつけながら歌い続ける。

彼、両足をつける。向きを変えてよじ登ってくる。

私、ワクワク。こらえきれず、手を出す。

彼、逃げ出す。

この日はここまでだった。しかし、どうやら彼との出会いが朧気に見えてきた。このボールを使っていこう。そして歌と。

一九七六、一〇、五

ボールの上でひとり立ち上がる！

今日は窓際にボールを押して行き、そこではずませる。

彼、先回のようにボールによじ登り、ついに立ち上がる。私の方へ？（そう思いたい）ほほえみかけてきた。

私、そっと手を出す。

彼、その手を握り返してくれる。

私、バンザイ。ついにつながった。

しかし、その後、彼との交わりは決して順調とはいえないまま一年。

一九七七、一一、一八

にしき学園にて児童相談所主催の療育教室、午後、私はAと二人になれる機会を持った。それまでの観察から、彼が音楽を好きなことは充分承知していた。歌いながら手をつないで歩く。

彼、初めはしぶしぶ。時々ストライキ。そのうち、何となく楽しくなってきたみたい。笑顔が見えてくる。公園でブランコやすべり台をして遊ぶ。九月以来の園外保育のせいか、彼の姿が実に伸び伸びして見える。帰り、私と再び手をつなぐ。時に私をからかいながら。

私、アー、つながったと思った。

こちらが「つながった」と感じられた時、それは何かを共感した

時だと思う。そして、その時から関係は伸び始めていく。「つながった」という時は、こちらの心を開いた時、こちらの構えをはらった時、すなおに彼らと共感できる時なのではないだろうか。こちらが彼らの心を開かせよう、開かせようとしても、決して彼らの心は開かない。反対に、彼らから見たらこちらの心が閉じている時なのかもしれない。何かふっと肩の力を抜いた時、リラックスした時、彼らと心がつながっていく。彼らから見たら、自閉的なのはこちらなのかもしれない。私は時々こんな風に思う。

Bとの出会い

彼は非常に弟思いであり、弟が泣くといっしょになって泣いている。弟はBにとって大切な存在なのである。私はそんな意味からもよく弟と遊ぶ。その事がBとの関係を深める一つの要因となっていると思う。たんぽぽ園が要助児のみの園にならないで、できれば健常といわれる子と共にある園であることが望ましいと思うのだが……。

Bはすばらしい切り紙をする芸術家でもある。彼に会ったのは昨年の九月、首をすくめて、肩を少し丸めるようにしてヒョイヒョイと歩いていた。私は一目見て、彼を好きになってしまった。彼には独特のことばがある。「ファッファッファッ」嬉しい時のことばである。「オニョオニョオニョ」怒った時のことばである。もっとも後者のことばは一歳五か月になるある女児も口をとがらして連発することばであり、とすると、言語発達のある段階なのかもしれない。

一九七七、九、二二

部屋の中をグルグルと落ち着きなさそうな彼がいた。遠くから彼の視線の先を捜す。どうやら、その先はおもちゃの車（船の形をしている）らしい。その車を持っていってやる。

彼、即座にそれに乗り、一日中走りまわっていた。私、アーッ。彼の好きなもの、安定するものがわかったと思った。

自閉的といわれる子らは、何か安定できるものができると、そこから世界を開いていくことが多い。ものを通して徐々に人間にも接して安心でき、やがて共に歩んでいけるように保育者はかかわっていかなくてはならない。急いではならないのだ。

一九七七、九、二六

昼食頃、Bのようすがいつもと少し違う。お弁当に入っていた笹の葉を持ってニコニコ。こちらに見えるように手でいじっていた。それを持って私の席近くまでやってきた。今朝彼がやってきたので大好きな車を渡してやったのだが、そのことが嬉しかったのであろうか。段々と彼を身近に感じてきた。

食後、散歩に出かける。彼のとなりを歩く。そっと手をさしのべる。

彼、その手をそっと握ってくれる。

二人で歩く。すごく感激。私の手、柔かだったかな？

一九七七、一一、一八

Bとの関係をもっと深めたいと思っていた。けれどあせっていては、かえっていけない。ふっと息を抜いてみなくては。

にしき学園での療育教室、まもなく終了という三十分前。ボールを体育館の隅の彼に向かってころがす。

彼、受けて投げ返す。とんでもない方向へころがっていく。

私、走っていってボールをつかみ、またころがす。

彼、返す。

この繰り返しをするうちに、やがてボールが確実に私に返ってきた。彼と私がボールでいっしょに遊べているのである。

私、少しずつ、少しずつ彼との間合いを狭める。ついに彼の横に坐る。ボールを彼はもてあそんでいる。

私、彼の柔かそうな髪をなでる。

彼、気持よさそうになすがままにされている。

本誌第七十六巻第七号の中で、津守先生が、「幼稚園では先生が、家ではお母さんが、子どものよりどころになっている」というようなことを文の中で書いておられた。先生がごく当たり前と書かれていることが、たんぽぽ園ではできているだろうか。たんぽぽ園は週二回しかない。しかも母子が共に活動するため、彼らの安全基地となる中心の保育者が、お母さんなのか、私なのか、彼らにはわからなくなってしまうことが多いのではないか。二つの違ったよりどころを作ってはいけない。私は日がたつにつれて、母子を分離する機会を持つにつれて、痛切にそう思うようになった。できる限り、母子分離を行なうことにした。

一九七七、一二、九

四十分の母子分離。子ども十一人に保育者五人、絶好の日だった。子どもには黙って母親を隣りの和室に去らせる。大きなボール、クッション、おもちゃの車、ブロック、楽器など、どの子もよく遊べている。Bはいつもの車にのっている。

三十分位後、車から降りて窓辺へいく。外は雨。

私、そっとBに近づく。彼といっしょに通りの車を目で追う。窓から手を出して雨を受ける。その時、彼がその手をひっぱる。ぬれているのが気になるらしい。

私、もう一度出す。

彼、再びひっぱる。そして私の手をギュッと握って笑っている。嬉しい。

突如として、ピカ！ゴロゴロ。彼、窓から離れて、一目散に大好きな車へ。母子分離が終わっても、まだピカ！ゴロゴロ。彼はお母さんの所へもいかず、車にしがみついている。徐々に彼は私との関係を深めてはきている。が、まだまだ、ものを通しての触れ合いが大切な段階なのだなと思われた。

Cとの出会い

彼とのつきあいは長いが、心がつながったと実感できたのは、つい最近である。

一九七七、九、二六

午前中、Cが窓辺の整理箱にのぼって手をたたいていた。今日はその彼の状態を受け入れてみたいと思った。私も窓にのぼる。ふと心をかすめる。外から見たら、変な二人に見えるだろうな。かまうもんか。ああ、いい気持ち。気持ちが高まっていくみたいに思う。彼がニコッと私を見た。私も嬉しくなった。

彼、私のみぞおちのあたりをポンポン叩く。

私、しゃがんで、彼のおなかをポンポン。

彼、手をパチパチ。「ウォウォウォ」

私、手をパチパチ。「ウォウォウォ」

彼。すっかりごきげん。私が腰をおろすと、ひざの間にすっぽりと体をうずめてだっこしてきた。私が「木の葉」を歌うと、静かに聞いて安定している。つながったと思った。

彼にとって、私は違う人間であるのに、私が彼の補助自我的役割を演じたために、まるで自分を鏡で見ているように思えたのではないだろうか。そのことが私との関係を密にして、やがて、一対一の関係で共に歩んでいく接在の状態になったのではないかと考えられる。

思うこと

子どもとかかわる時、こちらがあまりに明確な目的を持っていては、子どもが見えなくなってしまう。白紙の状態で、まずなすがままの子どもを肯定し、あきらめず、疲れることなく、その子に学んでいけば、そこにおのずと道は開けるものと信ずる。

そのために私が心がけている事をあげると、

一、視線に注意すること……私の近眼を長所として生かそうと思う。強い視線に、子どもが逃げ出すことがよくある。時に後から、横から子どもに近づいていく。

二、ことばかけに注意……ことばが遊びを規定し、又崩壊させることがよくある。体全体で子どもを受けとりたい。そして、ことばにあらわせないでもやもやしている子どもの心をかわってこと

ばにして出してやれたらと思う。

三、園外保育の充実……子どもは大地に接し、自然の中でこそ育っていく。

四、ものを上手に介在させていく。保育者自身をおしつけていってはならない。

五、音楽のつかい方……二度か三度の八小節の歌を作って、それに簡単な動きをつけてみたが、効果的だった。リズムを生かすことを考えながら、もう少し、コダーイを学びたいと思っている。

保育者は、子どもたちの心のよりどころとなる存在である。これが往々にして、子どもに対して「教える」「統率する」という姿勢を生みやすい。しかし、保育者こそが、子どもと接していく中で、自身がどう伸びるかを考えて行動すべきであると思う。伸びようとする姿勢がなくなった保育者は、保育者ではない。

たんぽぽ園は、本年十月、市立になろうとしている。そうなれば、今かかえている多くの問題も徐々に解決されていくことと思う。しかし、子どもらは「今、ここで」伸びている。今ここで充実することが次への発展につながると信じ、いつもベストの保育をと心がけている。

最後に、大好きな良寛さまの歌を一首。

「つきてみよ　ひふみよいむなや　ここのとを　十とをさめて　また始まるを」

良寛さまは最高の保育者であると思う。子どもは良寛さまといるだけで幸せになった。又、良寛さまも子どもといることが嬉しくてしかたなかった。大切な鉢を忘れて、スミレをつみ、手まりをつき、自然の中で子どもと共に生き、遊ぶ姿を思う時、私も又、幸せな気持ちになる。この歌は、保育の世界そのままであるとも思う。リズムを調え、繰り返していく中で保育は高まっていく。更に、輪が広がっていく気がする。何かにゆきづまった時、私は良寛さまを思い出す。一人で目を閉じ、ポンポン、ポンポンと呼吸を調えていく。私自身も自然の中へかけ出していく。するとそこから、また世界が生き生きと動いていくではないか。

保育の現場にいる者が保育を学んでいこうとする時、同職者の体験談や意見、技術等を学ぶと共に、他領域にも目をむけることが大切ではないだろうか、私はそんな意味からも好んで古典にふれる。すると、自分の中で大切だと思いつつもどうしてもことばにならなかったイメージがことばになって生きてくることがままある。つまり、私にとって古典にいそしむことが、理論化、言語化しにくい情緒の世界である保育をことばであらわす手がかりとなっているのである。そして、そこから又、新しい保育が始まっていくような気がしている。